僕は宇宙で生まれた。

母が宇宙船の中で産気づいたらしく、僕はそのままその宇宙船白河号の中で、偶然居合わせた外科医の手によって無事取り出されたのである。母はそのままその医者と交際し、将来結婚にまで至ったそうだから、運命とはわからないものだ。

そして僕はというと、そのままその宇宙船に取り残され…というか、呼吸器官適応措置（俗にいう通過儀礼、または洗礼のこと）を受けるために、設備のある最寄りの惑星に着陸しなければならないことになったのだが、母が頑としてそれを拒んだため、母を含む他の乗客は全員終着の宇宙ステーションで予定通り降り、僕だけそのまま白河号で一番近くの惑星まで連れて行ってもらえることになったそうだ。

だから、僕が母乳を与えられたのはその宇宙ステーションに着くまでの約一ヶ月間だけで、まあ、一ヶ月も与えられればもう体力的にも安定した状態になっていたとは思うが、そこからは人口のミルクと乗務員たち全員の交代制による献身的な育児によって一年間生きながらえたのである。

自分のことを僕といっているが、僕の性別は生物学的観点から見て女である。

僕が最寄りの惑星に到着したとき、僕は孤児としてその惑星の国際宇宙医療センターに預けられた。僕のような赤子は沢山いて、実親が何らかの理由で子供を育てられない場合に、一時的あるいは子供が自立できるまで、その子が生き延びるための最低限の食料や物資などを与えてくれる国連の機関がこの頃にはあらゆる場所に存在した。こうした機関は数十年前から盛んに設立されるようになり、里親への譲渡や、その子が住みやすそうな場所があれば積極的にそこと交渉して送り出すなど、臨機応変な手段で孤児たちの生きる手立てをなんとか見つけようと努力してくれていた。しかし、そのことがかえって子供を育てない無責任な親の存在を増長させる結果となってしまし、孤児の数は増え続けた。政府はこのことを問題視してあらゆる策を講じ、孤児の数はある程度まで減ったが、やはり法律のめをかいくぐって子供を置き去りにする親はなくならなかった。ある学者の統計によると、地球よりも宇宙で生まれた孤児の方がはるかに多いという。宇宙で出産した場合、または地球以外の惑星で人口物に囲まれた屋内だけの環境で育った人間が親になった場合、高い確率でわが子を手放す傾向にあるのだそうだ。僕はちょうど政府が考案した父母のどちらかが必ず実子を手元において育てることを義務づけた法律が可決される少し前に、母に捨てられた。その法律は可決されて一年あまりで虐待をしないかぎり、と付けくわえられたわけだが、僕はどちらかというとラッキーだったのかもしれない。なぜなら、はっきり言って自分から捨てることを望むような母親に、法律上の義務だからと言っていやいや育てられるのはごめんだった。それが虐待と呼ばれるレベルのことではなくてもごめんだと僕は思う。

僕が生まれる 40 年前、2357 年の人口減少問題には鬼気迫るものがあったという。まず、人間の平均寿命が 40 代まで急激に低下したことが一番の要因であった。原因は空気の汚染。地球の空気中の PMP5.6 濃度が人間が肺洗浄手術（プルックリー）や PMP5.6 援排出促進

剤（ポトンやNPNなど）を使っても害を免れることができないレベルにまで達してしまったことである。このことにより、まず免疫力の弱い老人や幼い子供が呼吸器系の病気にかかり死亡していった。慌てた政府は問題の解決に全力を投資したが、見る見るうちに世界人口はそれまでの約半分70億人にまで激減した。そして、その減少の90%が地球でのものであった。なんとか地球で生きながらえた人々も、40代半ば頃になるとやはり肺を悪くし、命を落とすものがほとんどであった。人々は他の惑星への移住を望んだが、地球を離れることは国籍を変えること以上に難しく、そう簡単に大勢の人達ができることではなかった。

政府は妙案を集い、屋外の空気から全く遮断されたクリーンエアールーム（CAR）なるものを高額で貸せるシステムや、PMP5.6を結晶にして空気中から取り除く技術なども開発したが、燃料の不足などの理由で、どれも結果的に救えるのは人口の1%程度でしかないということが判明していた。

ちなみに、ここで言う政府とは、2315年に月に設置された、惑星管理機関のことである。

2100年頃には地球はすでに、環境汚染が深刻化し人類は大きな選択を迫られていた。このまま地球を破壊しつくし、自らも滅びるか、あるいは破壊する前に自決するか…そして、最後の選択が惑星移住計画だった。何兆光年も離れた場所に、すでに地球と同じ条件であろう空気のある惑星が発見されていたのだ。しかし当時の宇宙船では、そのアーシスと名付けられた惑星にたどり着くには500年は裕にかかるという距離だったので、人類が移住を目論むにはあまりにも遠すぎる星だった。しかし、調査隊は送り出された。2412年現在でもまだ彼らの子孫はその送り出された宇宙船アメイジング・グレイス号に乗って先代から受け継がれた使命と規律を保ちつつその未知なる惑星に向かって進んでいることだろう。というか、そのような彼らの無事を知らせる速報が、毎年だいたい年末あたりにニュースのテロップで活字として控えめに流れるのだから間違いない。

しかし、アメイジング・グレイス号が宇宙に送り出されてからさらに100年後（西暦2212年）、人類が地球での質素な生活を余儀なくされ、公害や食糧問題などをなんとか乗り越えて緩やかに衰退の道をたどってきていたころ、ワープの技術がついに学者たちの手によって完成されたのである。ワープとはつまり光速である。光よりも速く走れるということは、今まで不可能とされていた領域での惑星間の移動や、あらゆる面でのコストの縮小、それに伴う多方面への開発の拡大及び他惑星からのエネルギー調達の可能性の拡大…。とにかくその発明は、人類にとって奇跡と呼ぶに相応しい、まさに史上最高の神の御業と称賛されたのである。

ワープの発明により、文明はまた急速に発展していった。それまで、火星にしか存在しえなかったコロニーが、他の数万光年離れた場所にある衛星や惑星に開発が進み、原料となる物質を周囲の星から調達することも容易にできるようになった。

そしてこの時点で問題となったのが、アーシスに向かうアメイジング・グレイス号の乗組員にこのこと、つまりワープの使用によってそれまでの計算の10分の一の時間でアーシスに到達することができるようになったという事実、を知らせるのかということである。

彼らの初代の乗組員はすでに宇宙船の中で亡くなっており、さらにその子供の子供までもが、今やグレイス号の使命をまっとうすべく生まれた時から独自の教育をされてそこに居るのだ。もし知らせた場合、彼らがショックで精神になんらかの異常をきたすか、あるいは憤り政府に対して訴訟を起こしてもおかしくない。最悪の場合、彼らはアメイジング・グレイス号を乗っ取るかもしれない。アメイジング・グレイス号は宇宙船というよりか、大きな一つの島のようなもので、正確なことは一般人には知らされていないが、50 人ほどの選ばれた人間が乗船し、ありとあらゆる植物、動物、設備が詰め込まれた、言うなればノアの箱船のようなものなのだそうだ。エネルギーの自給自足も可能であり、定期的にメンテナンスを行いながら、規則、規律を守って秩序ある人間関係を保ってさえいれば、半永久的に船の中で生きていくことができる仕組みになっているらしい。さらに、万が一に備えて核弾頭ミサイルまで搭載されているのだというからこれ以上のことはない。国連が可能な限りの資産を投資してつくられたそのような船が、独立した乗組員たちの手によって私有化された場合、全宇宙にとって脅威の存在になりかねない。彼らが、自分たちが人類の最後の要なのだと信じている限り、本当のことを知らせるのは止めようというのが国連が最終的に出した答えだった。まったくもって酷い話である。

このことは問題に上げられてから 70 年間、国民には秘密にされていた。“ワープとはその威力に比例して膨大な燃料を消費するため、現時点でのアメイジング・グレイス号までたどり着くことは不可能であり、たとえたどり着くことができたとしても、そこからアーシスまで継続して向かうのにはエネルギー面の問題からして不可能である。したがって、グレイス号のメンバーにはワープという技術の存在は、混乱と不審を招かないためにも伏せておくべき事柄として国連で承諾された。彼らには引き続きアーシス探査計画を遂行していただき、人類の未来のためにその身を捧げてくれている彼らに我々は常に感謝の意を表さなければならない。”というような内容の見解を、時の宇宙連邦総指揮官アーサー・増田・ドミニコフが、全宇宙国民に対して発表したのである。しかし、実際は従来とさほど変わりない燃料の量でワープを使ってグレイス号までたどり着けるはずだという説が、一般の学者の間では常識だった。

なぜ、知らせないかというのにはもう一つ理由があった。それは、アーシスが科学の発達によって死間近の星だったということが判明されたからである。観測不可能だったくらいの遠い星に近づきつつあるグレイス号のメンバーは、独自の観測でもうそのことに気付いているかもしれない。一説によるとアーシスの寿命はあと 2000 年弱。グレイス号のメンバーはもはや、自分たちの子孫がその土地で生きながらえることだけを目的としているのかもしれなかった。しかし、人類はワープを手に入れ仮に 50 年でアーシスにたどり着けたとしても一からの開拓、調査、全人類を移住させるには数百年はみなければならない。これまでの数千年の歴史を背景にした人類には、あと寿命が 2000 年弱しかない惑星に魅力を感じることはできなかった。それに、ワープという技術を手に入れた今、他にいくらでも生き延びる可能性は見い出せたからだ。

2300 年頃、政府はアメイジング・グレイス号の問題について記者会見を開き全宇宙国民に真実を述べた。つまり、もう技術的な問題はなにもないが乗船してくれた彼らの名誉を汚すことになるから、今新たな人間を 30 年あまりの歳月をかけてグレイス号に送り込み、計画の中止を告げてまた 30 年かけて彼らを地球に連れ帰ることはできない。さらに、彼らの目指すアーシスがユートピアになりえないと知った彼らがどんな行動をとるのか想像もつかない。だから、彼らには彼らの任務をまっとうしてもらった上で最終的にどうするかを決めたい。といった内容だった。

先行きの見通しが不十分なまま、早まった行動をとるからこういうことになるんだなと、国民の誰もが教訓に思ったことだろう。アメイジング・グレイス号はまさに生きた亡霊船になってしまった。実際に今も存在していることが、人類一人ひとりの心の中に苦い気持ちとして根付いてしまっている一番の理由である。そんな中の朗報は、彼らがもう音声の届かない距離にまで達してしまったために記号で送られてくるデータの中に、自分たちの無事と楽しくやっているという近況報告が含まれていることであった。

それから、さらに 50 年の歳月がすぎ、調子に乗った人類はまたもや母なる地球を危機に貶めていた。先ほど述べた大気汚染がその一例で、地球人口は 30 億人にまで下落。残りの 40 億の人々は宇宙の様々な個所につくられたコロニーに永住権をもつ人たちであった。PMP5.6 の威力はすさまじく、一年間普通に吸い続けると 40 代で死は確実と言われていた。

そんな中、学者たちが注目したのは、生まれて間もない赤ん坊が、PMP5.6 を含んだ空気を吸い続けた場合に、生き延びるものとそうでないものの割合がちょうど半々くらいであるといった調査結果であった。さらに、生き延びた赤ん坊はその後も呼吸器系の病気にかかることはなく、当時デッドラインと呼ばれていた 5 歳まで何事も体の異常をきたさなかったのである。先天的に耐性を持って生まれてきたのか、あるいは後天的に適応したのか、兎にも角にも学者たちはこぞってこのことに着目し、研究成果を論文として発表した。

そして開発されたのが、PMP 呼吸器官適応措置である。これは、生まれてすぐに肺に直接 PMP5.6 に順応させるための遺伝子細胞を組み込み、綺麗な空気と汚染された空気とを交互に吸わせることによって、徐々に適応できる体を形成するといったすごく単純な方法である。これには細胞破壊が起こり癌化するといった危険性があるため、体の出来上がった大人にとっては非常にリスクを伴うものだが、生まれたばかりの赤ん坊にはこの方法がほぼ 100%通用した。こうして順応した赤ん坊が、いったいどれくらいの年齢まで生き延びることができるのかまだ調査は途中段階ではあるが、今のところこの方法しか新たに生まれてくる人類を救う手立てがないので、どんな立場の子供でも一歳半までにこの措置を施すことが義務化されたのである。

と、ここまでが僕が施設の学校で習った人類の歴史の一部始終だ。それより前のことは大人たちはあまり話したがらない。過ぎ去りしよき時代のことは、手に入らないとわかっている希望と同じで子供たちに教えたくないのか、あるいはもう 500 年も前のことを振り返っても仕方がないと考えているのかもしれない。

だけど、僕は自分ではるか昔の日本のことや、地球のことを調べた。図書館には古い本もたくさんあって、夏目漱石や石川啄木なんていうもう化石みたいな部類の小説から、近代化が急速に進んでいたころの村上春樹や綿矢りさなんていうマニアックな人たちの小説まで読んでみた。どれも、今の自分たちの生活とはかけ離れたことばかり書かれているので、理解できないような部分もたくさんあったけど、辛抱強く最後まで読んだ。昔の人は文字通り地に足がついていただけあって、とても現実的で建設的で常識的な内容のものばかりだなと感じた。今じゃ誰が書いたかわからないような小説が勝手に自分へのおすすめリストに一覧としてアップされて、簡単なあらすじまでついてくる。その中から気になるものがあれば、無料かあるいは 10 円くらい払えばすぐにでも読めるのだ。昔の本みたいに紙もタブレットも必要ない。自分の SPC と平らな何か（一応それ専用の折り畳み式ボードはいくつかの種類が販売されている）があれば、大なり小なりそこにくっきりと画面を映し出すことができるし、平らなものがない場合は SPC だけでも音声で文章を朗読してくれる。瞼の上に極薄のコネクターを貼っていれば、まばたきの仕方によって SPC を操作することもできるし、目を閉じ続けていたら自動で電源を落としてくれるなど、まったく昔の人が知ったら、たまげて腰抜かすかもしれないな。グレイス号のメンバーじゃないけど、知ったら精神的にどうにかなっちゃうかもしれない。って、そこまではないか。とにかく、そういうわけで今の小説は気軽に発表できるせいもあってか、内容がハチャメチャなものばかりだ。いや、100 円とか払わないと読めない有名な作家のものでも、中身はぶっ飛んでる内容のものがほとんどであると感じる…。だいたいが宇宙人とか失われた楽園アーシスに関する妄想が多いが、アメイジング・グレイス号の内部の妄想や、まだ地球に行ったことのない人間が書いたものであろう地球での生活の妄想、またその逆…とにかくそういったリアルに基づかない、妄想、というには失礼だが理想と想像で構成されたファンタジー小説がほとんどだ。恋人が実は宇宙人で、未来の自分と結婚したが死んでしまい、代わりにタイムマシンでやってきて今の自分を連れて帰ろうとする話とか、自分へのおすすめリストの最下位のほうにあったので興味本位で“聞いて”みたが、夏目漱石のこころを苦労して読んだ後だったので、あまりのギャップに途中で吐き気をもよおして聞くのをやめた。

僕も今の地球には詳しい方じゃない。

昔から人間は宇宙人の存在を信じたり、否定したり、捏造したり、いろいろな形でメディアや娯楽に登場させたりと、様々な憶測を試みていたようだったが、全宇宙のほぼ半数にあたる星々を調査した結果、ついにその存在を発見することはできなかった。まだ、調査におよんでいない星にも、これだけ地球人の衛星や電波が飛び交う中相手からの交信の兆しさえないということは、大昔から想像されているような文明の発達しきった UFO に乗る宇宙人という者の実在は絶望的であるそうだ。だから、僕たちの時代の宇宙人の想像は、ずっと昔に流行ったグレイとかいう頭のデカい灰色の奴らじゃなくて、原始人みたいな半分毛の生えた人の形によく似た生物か、あるいは魔法が使えるから科学なんて興味ないといったその星だけのミラクルワンダーランドの住人という設定であることが多い。

ところで、僕がなぜ自分のことを僕と呼んでいるのかというと、この世界じゃ地域によってあらゆるルールや習慣が勝手につくられていて、ある意味混沌としているからだ。僕の育った施設がある地域は自分の性別を勝手に決めていいというルールがいつごろからか根付いてきたらしく、僕は物心ついたころ誰かに「女と男どっちとして生きる？」と聞かれ、とっさに「男。」と答えていたのだ。だから、国で管理されている僕の個人データには性別は男と記載されていると思う。SPC の上書き不可のプロフィール帳には確かに MEN という表示が確認できる。誰がどういった仕組みで手続きしたのかはわからないが、僕は 9 歳になったときこの事実を知った。それまでは自分の本当の性別にも興味はなく、個人データ管理システムのことなんて全然知らなかったし、この地域が特別に面白いことを子供たち自身に決めさせているのだといった客観性もなかった。僕は一応日本人ということになっており、日本の管理下に置かれている。しかし、育ったのは惑星ポロック N－721 区域の養護施設ヒバリで、ここは一応日本の領土ではあるが、3 キロ先の隣区域はイギリス領である。

しかし、そんなことはさほど問題ではないのだ。なぜなら、たとえ自分の見た目が女でプロフィールに間違いがあったとしても、この時代の人間関係というものはほとんどが画面上のやり取りとメールに電話なのであるから、性別がどうとか、人種がどうとか特に誰も気にしないのだ。近くにいる人間同士はそれぞれのやり方で独自の人間関係を形成していて、それで秩序が成り立っている。僕は日本人であるが、この先一生地球にある日本の本土に足を踏み入れることはないだろう。今メールやスカイフォン（リアルタイム動画つき電話）でお付き合いしている遠い別の惑星に住む人たちとも、おそらく一生生身の人間同士で会うことはない。

宇宙船で移動するということはとてもお金がかかることなんだと知ったのは、これまた 9 歳の時に施設の職員（と呼ぶのは冷たい言い方かもしれない。僕らは皆彼女のことを Mother or Sister をもじってマーサと呼んでいた。）にここから出たいと懇願した時だった。彼女はイギリス領にある施設からやってきた人で、金髪の髪と青い目をしていた。ちなみに僕は、黒髪に茶色の瞳に低い鼻、明らかにアジア系の人種だ。もしかしたらそれが理由で、赤子の時にここの施設に移されたのかもしれない。

その時にマーサは宇宙船に乗って別の惑星に移住するにはどうすればいいかを詳細に教えてくれたが、まず、乗船料が最低でも 10 万円。数日間乗っている場合食費が一日当たり 5000 円はかかるらしい。さらに同じ日本のコロニーに入るにしても、滞在手続き、身元証明などの手数料で数万円はかかるとか。さらに、長期滞在となると、日本人であることが証明されれば簡単に受諾はされるらしいが、やはりまた手数料とやらを国に払わなければならないのだそうだ。つまり、合計で 3、40 万くらいは持たないと、ここから出ていくことは難しいようだった。さらに、地球へ行くには特別な審査とパスポートが必要らしく、たぶん無理だろうとマーサに同情されながら言われた。

地球に行けないのならなぜ生まれたばかりの頃、洗礼を受けさせられたのか。僕は疑問

に思って聞いてみたが、なんでも法律が変わって、地球の人口が一定の水準に戻ったので、これ以上の人口過密と環境破壊を招かないためにも、人間の出入りがより厳しく制限されるようになってきたのだそうだ。生まれたばかりの子には、その子が将来地球に渡る可能性も考えて、全員に洗礼を受けさせることを国が赤子を発見した大人に対して、確認者の義務として定めているそうなのだが、さらに絶望的なことには、その適応措置の効力はその後まったく PMP5.6 を吸わなかった場合、20 歳になったころにはすでに耐性が無くなっているというのが通説なのだそうだ。僕はこの時 9 歳にして軽く人生に絶望した。

しかし、ものは考えようだ。お金を稼いでとりあえず別の惑星へ行き、自立しようと僕は思った。地球に行けるかどうかはそれからだ。

とにかく、小さな惑星のコロニーというのは閉鎖的なんだ。なにせ建物の外には空気が無くて、気温も高すぎたり低すぎたりなので、絶対に生身の状態で居ることはできない。日によっては高濃度の紫外線や放射能が飛び交ってたり、一メートル先も見えないような砂嵐だったりと、とても生物が生きていけるような場所じゃないから（少なくとも僕の育った惑星は)、巨大ないくつものドーム状の空間に、空気や地球と同じだけの重力、湿度、気温、ありとあらゆる環境設定を人工的に行うことによって、生物の存在を維持しているのだ。土や動植物などを地球から持ち込み、自然の森とまったく同じような空間を作り上げている公園もあったりする。人間の数は減ることはあっても増えることはまずない。いつも決まって 500 人くらいの人間が日本のコロニーには在住していて、誰かが出て行ったり、あるいは亡くなってしまったりした場合は、代わりにどこかから子供が連れてこられたりすることもあるが、上限が決められているのか、どういったシステムになっているのかはよく知らないけど、住民一覧の合計が 512 人より上になったことは見たことが無い。推察するに、たぶん単純に人が増えすぎると酸素が減るとか、空間が圧迫されるとか、そういった理由で人数制限しているのだろう。コロニー内では、厳罰はないものの、スポーツジム以外での全力疾走は禁止だし、むやみな争い事や、バカ騒ぎも禁止されている。というか、誰もそんなことしようとしないのは、本能的に生命の危険になるようなことを避けているからだろう。建物のいたるところに設置されている機器を、誤って壊してしまったりしたものなら、それがどんなに些細なものであっても命の危険に繋がってこないとも限らないのだ。しかし、自らの生命維持装置を外すように、数十年前、どこかから手に入れた銃をコロニー内で乱射した者がいて、一部の管理システムが破損して大惨事に至ったという話を大人から聞いたことがある。それはこの惑星ポロックから数億キロ離れた位置にある星の、アメリカの領土でおきた出来事だったそうだ。乱射した人間はその銃でその場で自殺したということだが、壊れた酸素供給機の一部は修復するのに数週間かかり、動揺した住民のメンタル面のケアや、法律の改正案など、様々な問題が巻き起こされた。

その頃から、食料の配給性がコロニー内の全住民に適用されるようになったのだそうだ。

それまでは、惑星間の移動は自由なのだから、食料も他と同じように自分の財産でまかなうべきだとされていたそうだ。まかなえない場合は強制的に地球へ送還された（その頃

の地球送還は将来的な死刑宣告のようなものだった)。しかし、コロニーでは仕事の量が圧倒的に少なく、あっても賃金は低く、重複労働は禁止されていた。なぜなら、あまり過密労働をさせると、ストレスが原因のいざこざや余計な燃料（ここでは酸素も燃料と表現されることがある）を使うことに繋がりかねないからだ。物資の節約のために、人々はなるべく質素に穏やかに生活することを求められたが、そのような状況下で家賃や食費を自分で何とかしろというのはあまりにも一般人にとっては精神的苦痛を伴う矛盾した条件だった。コロニー全体の管理にたずさわる、いわゆるエリートたちは安定した生活と収入を約束され、一定期間の仕事を終えたら別の星へ移動するといった生活をおくる者がほとんどだった。一般人からは隔絶されており、設備も使い放題。専用の船を持ち、いつでも自由に宇宙へ飛び立つことができた。

コロニーにはいろんな事情でやってきた人がいるが、基本的に 15 歳を過ぎると大人とみなされ、それまであったいろいろな援助がなくなる。食料の配給もその一つだったが、アメリカでのその事件がきっかけで、コロニーにいる間は、どんな人間でも平等に食料の配給を受けられるようになったそうだ。家賃は 15 歳になると月に 5000 円くらいは払わなければならなくなるが、例外もある。僕みたいな施設で育った孤児は、自分でお金を稼ぐことが難しく、他の星へ移住することもままならない。仮に移住できたにしても、そこでの暮らしもまた保障されていないので、政府は僕ら孤児には特別に家賃もタダにしてくれる法律をつくってくれたのだ。もちろんこれにもいろいろな条件に柔軟に対応できるよう、あらゆる抜け道が用意されているが、多くの孤児はこの法律のおかげで、というかたくさんの制約を受ける代わりにこの法律を受諾することによって、かなり年齢が上になるまで同じコロニーの施設内で生活していたりする。

とはいっても、今の時代、法律や世間をとりまく環境は常に変動している。数年おきに新たな規則や規定が設定されたり、今までのものが緩和されたりと、せわしなく形を変えて人々を混乱させていると言っても過言ではないが、そうでもしないとこの広い宇宙全体の組織をうまくコントロールしていくのは容易ではないのであろう。それに、そういった政府の柔軟性のおかげで、人々が将来に希望が持てるという良い面もある。

僕が最近ハマっている食べ物は、人類の黄金期とも呼ばれている 21 世紀前半のチョコレートの味に限りなく近づけたという、カカオ 0%のチョコレート味ガムだ。原材料はほぼわけのわからない単語の羅列だが、これがけっこう美味しくてカフェインも含まれているので癖になる（ノンカフェインバージョンもある)。暇な時についつい口にしてしまう食べ物だ。ガムはとにかく噛めと言われる。プロテインサプリメントや栄養剤が多い中、咀嚼力を低下させないためや、食べるということの充実感を少ない量で長時間持続させることのできる嗜好品として、ガムは若者の間では重宝されている。

もちろんコロニー内にも普通の形ある（という言い方は変かもしれないけど）食べ物はある。刺身や牛乳なんてのは貴重品だが、たまに瞬間冷凍されたものが他惑星から運ばれてきて、運が良ければ口にすることもできる。果物はこの N－721 区域では、ミカンとリン

ゴの培養が成功しており、それらは季節が来ると一日に一個ずつくらいは食べることができる。まあ、あとは普通に卵とか野菜とかも生で食べることができるが、大量生産はできないから三日にいっぺんとかしか与えられず、ほとんどの配給はよそからの輸入品である乾燥した加工食品やサプリメントである。不味くはないが、なんと言うか、時々自分が何を口にしているのかわからなくて気味が悪くなってくる。うわさによると、エリートたちは毎日のように生ものを食べ、朝はご飯と味噌汁まで支給されているという。僕ら一般人は、日本の伝統的な食べ物であるごはんと味噌汁でさえ、それほど口にすることはできないというのに。

ま、そうは言っても僕らはエリートたちのおかげで生かされているというのはまぎれもない事実なので、別に不満を申し上げる気はない。ただ、僕はいずれはこのコロニーを出ていくと心に決めている。エリートに弟子入りして、学者になるという道もあり、僕の周りの友達の多くがそれを望んでいる。しかし、僕はまず地球に行きたいんだ。

僕も 9 歳まではこんな閉鎖的なコロニーでの生活も、我慢できないことはないと思っていた。命あるだけで幸福と幼いころから教育され、強欲や破壊的行動は全体の死に繋がると繰り返し警告されてきた。自分たちは時代の流れのほんの一部だが、人類の進化の過程を体現する証人の一人であり、その先に輝く未来が待っているのだ。と、半ば宗教じみた説教で自分らを納得させようとする大人を、別に変とも酷いとも思わずに、要はおとなしくしていろということが言いたいんだなと子供ながらに理解していた。

僕は SNS（ソーシャルネットワークサービス）を 5 歳の時から始めたのだが、そのときからの友達の中に、一番年上で頭も良く、ちょっとやんちゃな感じの男の子がいたのだが、彼がある日僕にだけ秘密の贈り物があると言って、交信してきたのだ。それがちょうど僕の 9 歳の誕生日だったのだが、なんとそれは今現在の地球の画像だったのだ。

僕が生まれ育った時代では、ネットワークは制限され、地球の情報はほとんど政府から与えられるものしか耳に入ってこなかった。テレビというものはそもそも子供たちには見ることが禁止されていたからどうなっていたのかはわからないが、15 歳になった今、テレビを見ることが許されていてもあまり見る気はしない。なぜなら、テレビにはやはり現在の地球の映像は流れず、放映されるものと言えば、僕にとってはどうでもいい内容のニュースや昔のお笑い番組の再放送などである場合がほとんどで、どれだけ中身を薄くするかにかけているとしか思えない。中身を薄くして視聴者を呆れさせ、または興味を失わせて批判を避けているともとらえられる。あと、どこかの星でやっているスポーツ大会というのもたまに放映されるが、これはまあ、見ていて面白いこともあるが、試合が終わらない内に突然放送が中断されたりして、イライラさせられることも多々あるからすすんで見たいとは思わない。

食料は、そのほとんどが地球で生産されたものだそうだ。それを聞くとまさに、母なる地球という気がしてくるが、よく考えるとそれはいたって当たり前のことだ。他に自然の力で食べ物を生成できる星は見つかっていないのだから。